

黄金のクラージュ

つけ麺太郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

よくある異能力バトルの小説を書いてみたかった。

一話

目次

1

一話

真夜中の暗い裏路地に、血に濡れた青年が走る足音だけが響く。彼の顔は生気を失ったように青ざめており、息は荒い。

「はあ、はあ、はあ、??なんで??どうして俺がこんな目に合わなきやいけないんだ!??嫌だ嫌だ嫌だ!??死にたくない??」

路地の行き止まりに追い込まれた青年の前に、銀色の異様な生物が姿を表す。

——青年に銀の槍が迫った。



繁華街はいつもの様に活気に満ちており、行商人や運送屋が巨大な亀に乗って街を駆けていく??。

この街の名はガラノス。アルケード王国の東にある商業の盛んな街であり、街中の建物の大半が綺麗な水色のレンガできていることから『青い街』とも呼ばれている。

「伝説の名酒、竜王殺し??はう??ついには??ついにわたくしの物に??」

繁華街にある酒屋の店内で少女の歓喜の声が響いた。

まだ少し幼いが、美しい女だ。黄金色のサラサラした長髪に、宝石のような青い瞳、肩を露出した黒いワンピースも相まって年齢不相応の色気を醸し出している。

「もちろん一点物だぜ。サラのお嬢には、いつも最良にしてもらってるからな!??大切に飲んでくれや」

無精髭を生やした大柄な店主は、いい笑顔で彼女に酒ビン差し出した。

「高級酒である竜殺しをさらに30年熟成させた幻の名酒ツ!??絶対に??絶対に大切に飲みますわ!」

彼女はだらしなく目と口を緩ませ、酒ビンに頬釣りをしている。大層ご満悦な様子だ。

彼女の名はサラ・レックレス。半年前にガラノスに越してきた17

歳の少女である。

「マスター、今日は良いもの売っていただきありがとうございますわ。また来ますわね」

酒場を後にしたサラは、再び繁華街へと繰り出した。街を歩く人々はある話題で持ち切りである。

——昨夜ネイビー通りで人が襲われたらしいぞ。なんでも被害者は通力者って話だ。

——最近物騒よね??。ウイルスさんがなんとかしてくれたらいいけど??



「銀色の化物が、突然家の窓を割って入ってきたんです??。通力のおかげでなんとかここまで逃げてくれました??!」

「その銀色の化物の詳しい見た目や特徴は分かりますか?」

「??真夜中で暗かったので具体的な大きさは分かりませんでした。少なくとも私の体躯の三倍はありました。??槍のような鋭い尾を持っていて、それを凄く速度で突刺そうとしてきました??。とにかく??とにかく恐ろしい化物でした」

青年は包帯から血の滲む右肩を押さえながら、体を震わせた。右肩以外にも数ヶ所包帯を巻いている箇所があり、服もいたる所が切られたかのように破れている。

「ありがとうございます。次に??!」

ガラノス中央街にあるアルケード軍第四師団駐屯地では、取り調べが行われていた。昨晚、ネイビー通りで襲われた被害者の青年が駐屯地に駆け込んできたのだ。

腰に剣を帯びた二人の男、師団員であるロニーとトニーは今回の事件について語り合う

「鋭い尾を持った銀色の化物??。間違いなく犯人は通力者ですね??」

「団長が不在のこのタイミングで??。最悪だぜ??」

「団長の言いつけ通り、この件はサラさんに相談するべきでしょう」

「サラ???あのゴリラ女にか?」

「こらっ!サラさんは団長の友達ですよ!だいたい女性に対してゴリラとは??」

「あー分かった分かった!俺が悪かったからもうよしてくれ!?!」
「たたく
紳士振りやがって」

「振りじゃない!僕は紳士です!」

二人が渡り廊下を歩きながら喋っていると、向かいから全身鎧の大男が近づいてくる。

「相変わらず仲がいいな、お前らは」

大男は二人組にいつもの調子で話しかけた。

「あつ副団長!お疲れ様です!」

大男の名はロック。アルケード軍第四師団にて副団長を務める男である。

「副団長、いつも言っていますがこんな似非紳士野郎とは仲良くないですよ」

「トニー!その似非っていうのを止めて下さいっていつも言ってるでしょう!」

二人のいつも通りのやり取りを見届けたロックは肩をすくめた。

「二人ともじやれてねエで仕事行ってきな。件のサラの所だ」



「ふんふんふーん♪ふふふふふーん♪」

コバルト通りにある少女の家から珍妙な鼻歌が聞こえてくる。彼女はお玉で鍋の中身をかき混ぜていた。どうやら何かを煮込んでいるらしい。

「おーい!居るんだろゴリラ女!開けてくれー!」

少女は凄まじい速度で玄関を飛びだし、トニーに飛び蹴りをお見舞いする。

「誰がゴリラじゃー!」

「ばべらあー!」

珍妙な悲鳴とともに、トニーはノーバウンドで十数メートル吹き飛んだ。

「お久しぶりぶりですね。サラさん」

ロニーは何事もなかったかのように、サラに挨拶をした。